『平家物語』「木曽の最期」テスト問題〈1／3〉

【一】本文について、設問に答えよ。

木曽左馬頭、その日の装束には、赤地の錦の直垂に唐綾縅の鎧着て、鍬形打つたる甲の緒締め、いかものづくりの大太刀はき、石打ちの矢〈1〉の、その日のいくさに射て少々残つたるを、頭高に負ひなし、滋籐の弓持つて、聞こゆる木曽の鬼葦毛といふ馬〈2〉の、①きはめて太うたくましいに、黄覆輪の鞍置いてぞ乗つたりける。鐙ふんばり立ち上がり、大音声をあげて名のりけるは、「昔は聞き②けんものを、木曽の冠者、今は見る③らん、左馬頭兼伊予守、朝日の将軍源義仲ぞや。甲斐〈3〉の一条次郎とこそ聞け。互ひによいかたきぞ。義仲討つて兵衛佐に見せよや。」とて、をめいて駆く。一条次郎、「ただ今名のるは大将軍ぞ。あますな者ども、もらすな若党、討てや。」とて、大勢の中に取りこめて、④我討つ取らんとぞ進みける。木曽三百余騎、六千余騎が中を、縦様・横様・蜘蛛手・十文字に駆け割つて、後ろへつつと出でたれば、五十騎ばかりになりにけり。そこを破つて行くほどに、土肥次郎実平二千余騎でささへたり。それをも破つて行くほどに、あそこでは四、五百騎、ここでは二、三百騎、百四、五十騎、百騎ばかりが中を、駆け割り駆け割り行くほどに、主従五騎にぞなりにける。⑤五騎がうちまで巴は討たれざりけり。⑥木曽殿、おのれはとうとう、女なれば、いづちへも行け。我は討ち死にせんと思ふなり。もし人手にかからば自害をせんずれば、木曽殿の最後のいくさに、女を具せられたりけりなんど言はれんことも、しかるべからず。とのたまひけれども、なほ落ちも行かざりけるが、あまりに言はれたてまつりて、「あつぱれ、よからうかたきがな。最後のいくさして見せたてまつらん。」とて、控へたるところに、⑦武蔵の国に聞こえたる大力、御田八郎師重、三十騎ばかりで出で来たり。巴、その中へ駆け入り、御田八郎に押し並べて、むずと取つて引き落とし、わが乗つたる鞍の前輪に押しつけて、ちつともはたらかさず、⑧首ねぢ切つて捨ててんげり。そののち、物具脱ぎ捨て、東国の方へ落ちぞ行く。手塚太郎討ち死にす。手塚別当落ちにけり。

問一　次の語句の読みを、ひらがな（現代仮名遣い）で答えよ。

①直垂　②鞍

問二　〈1〉〜〈3〉「の」について、

（1）同じ用法のものはどれとどれか。

（2）（1）の同じ用法として、適切なものは次のうちどれか。

ア　主格　イ　連体修飾格　ウ　同格　エ　体言の代用

問三　傍線部①は何について述べたものか。一語で抜き出せ。

問四　傍線部②・③の助動詞の意味の組み合わせとして、適切なものは次のうちどれか。

ア　②過去推量　③現在推量

イ　②過去推量　③現在の原因推量

ウ　②過去の原因推量　③現在推量

エ　②過去の原因推量　③現在の原因推量

問五　傍線部④の現代語訳として、最も適切なものは次のうちどれか。

ア　自分が討ち取ったと進言した。

イ　自分は討ち取られまいと進んだ。

ウ　自分を討ってくれと進言した。

エ　自分が討ち取ろうと進んだ。